

# 「源氏物語」が故郷だった人

平瀬 隆之

寂聴さんには、三度お目にかかりました。三度目は全く偶然の出会いでした。

平成某年の秋のことです。私たち家族（私、妻、息子）三人は、京都・百万遍の「梁山泊」で昼食を終えて、店を出ようとしたその時です。寂聴さんが、雑誌社の人らしき数人とタクシーで乗り付けてきました。私が、三月にラジオ番組の取材でお世話になったNHKの平瀬ですと挨拶すると、

「ああ、あの時のアナウンサーさんね」と覚えていてくださった。そしていきなり、

「あなたパソコンやっている」と質問が飛んできたのです。

私が戸惑いながら、今や職場の書類はすべてがパソコンになりましたと答えると、

「私も水上勉から勧められてね、今日は、パソコンがテーマで誌上対談があるの。源氏の翻訳にはうってつけだと思う。早く使えばよかった」と呟くようにおっしゃった。

妻が、「今、寂聴さんの源氏物語を読ませていただいています」と告げると、寂聴さんの顔から笑みがこぼれ、「有難う」と言ったかと思うと、私の方を振り向いて、

「あなた幸せね、源氏を読む女性ほど素敵な人はいないわよ。いい奥さん持ったわね」と褒めてくださった。

寂聴さんは褒め上手で、こういう場合の去り際のセリフがとても素敵な人でした。法衣を翻して店に入っていく姿

が、颯爽として、しばらく後ろ姿を追ったものです。

私が寂庵を訪ねたのは、その年の三月のことです。郷里・徳島に作られる文学書道館への期待と注文を聞くためでした。予定したインタビューの収録を終えたものの、私は今一つ満たされないものを感じていたのです。寂聴さんから強烈な故郷愛を引き出せなかった自らのインタビュー技術の拙さを反省しながら雑談に入りました。

寂聴さんには、郷里・徳島を舞台にした小説がほとんどない。これはかねてから私が訝しく思っている事でした。そのことを尋ねると寂聴さんの表情が一瞬変わり、笑みが消えて何かを射抜くようなキリッとした目になりました。

「私にはね、土地に帰属したものは書けないの。生涯、男と女がテーマだから。有吉佐和子さんに『紀ノ川』という作品があるでしょう。土地の持つ長い歴史、培われた文化、そこで生活した伝統ある家系、どれ一つとつても紀ノ川と関係が深いわね。土地には地霊が宿っていて、有吉さんは、紀ノ川の地霊に導かれてあの作品を書いたのよね。私には、そういうインスピレーションを徳島から受けたこ

とがない。どうしても故郷をクールに分析的に見てしまうのね」と話した後、コーヒーの話が始まった。

「私はね、普段はお茶をいただくのだけど、徳島に帰るとコーヒーを飲むの。徳島には自家焙煎の店が多いから、どこの店でもコーヒーが美味しい。自家焙煎の店を京都で探すのだって大変よ。徳島の人は凝り性なの、何事にも拘る。拘るというのは垂直思考。水平に広がっていかない。そこが、徳島の人と高知の人の違いね」

寂聴さんには、のちに野間文芸賞を受けた自伝的作品「場所」がある。過去と現在が交錯しながら進行する「時間」が縦軸に、土地つまり「場」が横軸となる作品だ。地名はいくつか出てくるものの、作品のテーマを暗示するものではない。いささか即物的と思える「場所」という題名も、その点で理解できる。

——寂聴さんの現代語訳も手伝って、このところ、源氏ブームですね。各地で朗読会も開かれています。

「結構なことです。日本人はアイデンティティを失ったと言われているけど、源氏物語を読めばいいの。いつだって心の故郷に戻れるんだから——。三島由紀夫がね、源氏

物語の巻の名を聞くだけで、感性が動き出すと言っている。まったくその通りね」

——寂聴さんが「光源氏」を語る時、「ヒカルゲンジ」と語頭にアクセントを置きますね。私にはあれがとても新鮮に響いて、一層、光源氏の存在が輝かしいものに感じられますが…。

「源氏はもともと、光る君、光る源氏と呼ばれた。そんな事が私の潜在意識にあったかも知れない。源氏は本来、宮廷に仕える女房が、若い姬たちに語って聞かせたものだから、当然、語り手の個性が働いたり、感情移入もあったり、時には即興で小さなエピソードを挟んだりして、いろいろな工夫があったと思う」

——幸田弘子さんと白石加代子さんらの素晴らしい朗読があります、寂聴さんの念頭にある法話調の朗読も聞いてみたいなあ…。

「私は駄目よ。すつとん狂な声だから。それに阿波弁の訛りもあるようだし…」

——司馬遼太郎さんが、京ことばの原型は阿波ことばにあると言っていますか…。

「ああ、あれは確か『街道を行く』だったね。私も読んだけど、根拠のある話でもなさそうだし、エキセントリック過ぎる。どう考えても逆よね。公卿たちが西へ下ったのだから…」

——源氏物語に話が及んで、雑談は尽きなくなりました。ひょい与时計を見ると、お暇の時間がきている。寂庵にいと時間の経つのを忘れてしまうと言うと、

「日本には、古来から、源氏的时间が流れている。あの本に書かれた色恋、政争、日常の人間関係は、営々と続いているのね。源氏物語には大団円というものがない。流転あるのみ。営々の時間ね。これは仏教思想の根幹かもしれない」

——そう言えば、同じ好色の主人公スペインのドンファンは、最後、地獄に落ちて終わるのですよね。

「そうそう断罪ね。西欧は罪の文化だから。ところであなたは、源氏物語の女性の中で誰が好き」

私は、にわかに返答に窮したが、

——妻をめとらば、紫の上でしようかと答えた。寂聴さんは、即座に、

「あなたもやはり日本男児ね」とおっしゃった。

私は帰りの電車の中で、【紫の上＝日本男児】と、幾度も反芻しながら、はっと気がついた。寂聴さんの故郷は、徳島でも京都でもなかった。それは「源氏物語」だったということに。

「場所」の終幕で、寂聴さんは「出家とは生きながら死ぬこと」と書き残している。裏を返せば「出家によって永劫の時間を得た」と私は理解する。「場所」で描かれた生涯に、悔恨の念は薄い。生と性を思う存分謳歌した寂聴さん。にもかかわらず、女性を失望させることもなく、男性の恨みを買うこともなかった。これこそ多く読者をひき付けた理由ではないか。今、彼の地で、光源氏とどんな会話が弾んでいるのか、想像するだけに楽しい。